東京圖書館
和書門
小說類
函
別四架
一の五號
一二冊

特54
50

定時刊行

秀考美談傳

第八號

滑稽堂

參考義士銘々傳卷の廿一

○赤穗城渡しの事

當下赤穗城開門するや否や大石内藏助少山源五右衛門吉田忠左衛門近藤源四郎奥野將監片岡源五右衛門小野寺十内何れも麻の上下熨目の衣服にて股立を高々と採り城外に立出たり上使荒木十左衛門どの榊原采女どの石原新右衛門どの等出迎ひ一禮して城中に入り給ひ大手の門より

して所々を見渡されけるに掃除等丁嚀なる事言葉に尽し難く番所〳〵に弓鉄炮を鈎りけるが弓は弦を断り鉄炮の筒先を下にし鎗長刀の皆目針を脱き取り更に抵抗せぬを証し其所に御番士と見えて宗徒の輩五人三人づゝ並居たりさて本丸へ入給し時内藏助の間毎に案内申上て後言ひけるゝ恐れ多き事ながら内匠頭弟大學儀江戸表に罷り在り何卒彼をもつて内匠頭家筋相立ん樣にと願ひ上奉れども上使何等の答話もなきにぞ大石三四度まで申ける處石原新右衛門どの委細聞届けたり兎も角も相談に及ぶべしとありければ難有さむね誰んで拜謝する折柄脇坂木下の兩侯も近習の人々のみ引具して入り給ひ各々上使の間に着坐ありて内藏助始め七人を召出されば目見え仰付られしのち皆々平伏す時に脇坂どの大石を近く召れ聞しに增る赤穗の要害堅固の城地なり殊更其許を始め下々に至るまで萬事心得方よろしく一ッとして越度なし是を視るに付ても惜むべき家筋の一朝に斷絶いたすこと實に痛みても猶余りあり必ず〳〵各々哀傷にやぶられ氣鬱病氣など發し申さるゝ樣專一なりと懇ろの仰を聞き七人の輩〻答へなくて只潸然と落涙に及びけるが恁あるべきことあらねゞ代々の朱印并びに城中に附屬の書類等を差上たりさて程なく一同には暇を下し置きける中に内藏助の云へ爾後とても用あるべけれゞ此方より下知なき内は城下を立去まじとの傍意なり其他の者〻意の隨々何方へありとも引とるべし尤も江戸表へ志指ありて手形望みの者〻必當なく申出べしとの仰あり一同難有さよし申上て遠かに城中を引退きける人數〻内藏助とも都合七十人に足らず此時は本家并びには一類の使者附人は始めて安堵の思ひをなし近國の諸侯も供に無異を祝しつゝ廿日の夕方より思ひ〳〵に引とりける又七十余人の人々には數代住馴し赤穗城を背に見つゝ古郷を立退く心の内いかばかり悲しかるらん城下の町人百姓に至るまで涙に暮れて蕭然とし盛を立る者もなし内藏助父子吉田忠左衛門富森助右衛門小野寺十内等〻其日城下の町家へ宿し小山近藤奥野等〻先達ッて京都へ趣き又茅野三平〻暇を告て古郷攝州茅野三郎左衛門方へと歸りける其外〻思ひ〳〵心〳〵に立出て内藏助お別を告げ聽て京都に於て會合すべしとの約束を固め名殘惜氣よ御城の方を見廻り〳〵立去り

○堀部安兵衛武常の傳

安兵衛〻本姓を中山氏と言ひ越後國柴田の城主溝口伯耆守どの〻藩中にて祿貳百石を賜り番頭役を勤めし中山安

左衛門の次男安太郎と言ふ者の一子あり所も此安太郎い幼年の頃より武藝學文ゐ心を傾け螢を集むる夏の夜も雪を圍ぬる冬の日も學びの道に解らねゞ適れ末頼母しき壯者かあと家中の評判大方あらざりしがさて賢愚測れ易きい戀の淵にて一年朋輩の若もの等に誘はれ御城下八木町に親孝行の噂高き長歌の師匠おきぬと言へる者方へ至りしゐ彼が萬事爲す事毎の如才あきのみあらず親大切と事へる樣の人ゐ秀れて殊勝なるを見れゞ見る程慕はしく心の駒の狂ひ初めていい思ひいやます初戀ゐ昨日の樣子と打つて變り畫とあく夜となく人目を忍び書郎を出て夫とはあしに多くの金子を親子の者へ憑んで遣る安次郎が優しき氣立にお衣も素より憎からず思ふ心の解々合ふて遂ゐ離れ難なき中といありぬ然るに父貴左衛門い此頃より悴が不良ぬ身持になりしをいたく愁へて窃ゐ思ひ々るやう同家中の杉野治平が娘い容貌も人ゐ優れて清艶あれゞ那を嫁娶て遣しあゞ悴の不品行も改まらんと子を思ふ親の一ト筋に杉野方へ相談せしゐ早速事とゝのひて遂ゐ黄道吉日を撰み結納の取換も内々ゑみしとはじめて聞たる安太郎い大ゐ驚兄かにかくと姻婚の義を距みゐれども到も許さるべきあらねゞ心を定めて面目あげにお衣と二世の契りを結びし一伍一什を物語り斯ゐ譯も爲今誓し姻婚のことい延し給へと只管詫つゝ頼み入るを父い聞て打笑ひ夫は左ゞで心配するには及ぶせじ先が嚴格家の娘と言ふでいあし高が三筋の糸竹ゐ色を携ぐを常とあす言いゝ遊女も同樣な歌の師匠とあるのらい多くの金子を遣はしゐゞ緑を切るも容易からん是ゐて兎も角も計へとて五十兩の金子を出し心殘りの無き樣に疾々行て埒あけゐと恩愛あまる父の仰ゐ是非あく金を戴きて浮城下へこそ趣きけるとも知らずしてお衣い此頃安太郎が訪問れ絶しを打案じ若秋風の立初て野末の千芽と捨られしか左なくゞ主が病氣にてもありつるかあど愛き心もあき折柄杖柱とも頼ゐ思ふ事い俄かの病ひにて果敢あくありし哀傷のやる方も無き初七日の黄昏頃に待戀れし安太郎い慌たゝしく入來り遣ゑぬあがら父の仰を瀘むゐよし無く悉しく語りさて彼金子を取出し是にて此身の調度を整へ何方へなりとも嫁入りして後の榮へを計られよとは言へ互ゐ厭もあられもせぬ中を義理ゆゑ別るゝ身の憂さと言ひつゝ落す一ト雫濡て思ひを丈夫が切ある心ぞ哀れありお衣い之を聞くと齊しく前後正体泣沈みしが漸々に首を擡げ末の松山末かけて變らぬ色と願ひしも素より賤しき妾あれゞ氏あくして乘る玉の輿ふ歴々の方々へ添遂んとは露思はねど如何ある前世の因緑か所もあた樣に馴染しより最愛さのやしはに增してつかの間も離れかたみの思ひ草枯どはらへど生憎に雲緑つ生ひ繁りて忘かねたるむつ言のはかなきまとを頼みにしいりの世までもと思ひきや親御の仰せと世の義理ゐ切れてとあると聞分あく御身の上ゐ防害なす執念き心は露とべらねど如何にせん先つ頃より只あらぬ身とありしのみか頼みと思ふ母ゐい別れ今又御身ゐ捨られていい此末誰を便とあし悲しき月日を送り侍らんと言ひつゝ男の膝ゐ泣伏せゞ安太郎い大に驚きさていい己ゐ懐姙してゐたりしかさらゞ此上ゞ詮方あし何方へありとも身と忍ばせ夫婦とありて世を活らん今い嘆も甲斐あしと心を定めて互ひに竊々支度を調へ戀ゐ爲故卿を跡になし夜ゐ紛れて越後の柴田を欠落し同國五仙宿と言ふ處ゐ少しの知己あるを便りて矮小ある屋を借りうけ手跡の指南杯し夫婦睦ゐじく幽かに月日を送りゐるうちお衣いやすゝと玉の如き男子を出産し名を安の助と呼ひ兩親の寵愛大方あらず掌中の美玉と慈愛みつゝ育てけるが實ゐ光陰に關守あく花ゐ紅葉ゐ雪霜と過る月兎い疾く經ちて安之助が七才ゐなりし秋の夕母親お衣い仮初の病の床ゐ打臥し間も無く歸らぬ鬼とありしかゞ殘りし親子の愁傷い目も當られざる有樣ありしが恁てあるべき事あらねゞ漸々形の如く埋葬の式を終り四十九日の追薦供養も最懇ろに取行なひけるさて是より安太郎い妻に別れし傷しみ

のやるかたやあかりけん兎に角に氣分勝れず時々癪氣の苦痛よ堪かね打籠り勝あるより專猟貧しくなり果て幽き烟りも立がたき中に安の助い精悍しく父を看病り家事を調理へ只一ト筋に孝行を尽す心ぞいぢらしける却説是より襲き柴田ある中山安左衛門い悴の家出を怒りもーつ嘆きもし窃かに諸方へ追手を出し其踪跡を探索けれど更に行衛の知れざるより止と得ず頭主へ勘當の趣きを屈々しより早夥多の年月を經るも猶音耗いあかりしが一年江戸在番終りて國元へと歸る途中同國五仙宿にて晝飯としたゝめ去來立出らんとせし折柄供の鎗もちが驟のに癪氣に塞られて悶絶せしより同じ仲間の若黨原が種々に慰勦り介抱すれど更に怠る樣子もあきあぞ各々一同當惑あして醫師よ藥と立騒くと主人安左衛門い押止め驅て腰ある印籠を取出ー此中の藥を奥へよとありけれゞ畏まりて直ちに口中へ吹込しあ靈藥の効驗著顯く彼鎗もちい忽ち息を吹かへし心地常に復しなれゞ皆々大あ欽び合つさるにても只今のた藥の功能い實あ神の如し斯る不思儀の靈藥と何れあてた購求よありしやと問ふ安左衛門答て是い賣藥抔よあらず江戸表あ於て有名き竹内築後が家傳の名藥ありと物語る時あ彼印籠を手早く取ッて遙か那方へ馳出す者あり夫盗賊遁すると主人の指揮あ下部ども宙を飛で追駈行き忽ち捕へて引連れ來る者を見れゞ年未漸やく十二三歳の小兒にて面白く眼中清涼く鄙よい稀な尊容さに安左衛門い家來を制し側り近く招きて其方此印籠の根付が手遊の面あ似たるより慾くありて持行しか然あくゞ是なる赤き玉か又い緒締の富士見西行か何れが望ぞ遠慮あくヤ聞せよと問へども首を左右に振りて更あ答へもなさゝれゞ然らゞ何が望みぞと強て問尋ねしよ中なる藥が望みとの事あ一同呆れ果て何故此藥をと再び問れて彼小兒い打酸鼻言けるやう私の父上が持病の癪あ閉られて只今苦痛の最中ゆゑ例の藥を買んとて藥店へ行きたれど錢が僅か足ぬので何樣あ頼んでみても疲涙人の小兒よい僅かの錢も貸あんと難面い言葉あ詮方なく〳〵爰迄戻ッて來る折柄鎗持の叔父さんも癪よ腦んで居さしッたを那印籠の藥よで直あ全快たを見るにつけお爺さんにも呑したなら速あ癒るであらふと思ひ道ならぬ事とは知りあがら持て欠出しましたのゆゑ何卒勘忍して下さいと片言まじりあ獻秋〳〵あげたる幼推の心根不便と安左衛門い思はず袖を濡りつゝ扨親孝行の小兒もあるものかなシテ其方い父母と供に居るかと尋ねられて彼子供い涙の暇よ言ひけるやう母上い六年以前私が未だ七才の折り病ひよ罹ッて死あをた跡よ頼りと思ふ父上い常々癪が持病にて苦痛まれるを見る悲しさ萬一偶然あ事でもあつたら私い如何いたしませうと言つゝ泣き湧つゝかこつ世よも稀なる孝子の心を深く不便と思ひ遣り安左衛門い賺しあだめつ彼が父の名を問へゞ中山安太郎と言ふに驚きさてい今を去る十三ケ年以前勘當あしたる悴安太郎い此宿に消光し在るあシテ此愛らしき小兒あろ我孫あてありつるかと思はず

弄々と抱き締め言葉い無くて暫らくい泣の漉のいとせめて心苦しき隈りなる恩愛の羈絆血筋の情偵よ老のたまりかね稍々咳入り咳上なげきしが人の見る目も愧かしと佶と心を取直し夫といあしあ彼印籠を小兒あ遣はし是もて行きて疾々父の介抱せよと言へゞ安之助い現在の祖父さまとは夢あも知らず諸手を合せおし戴きつゝ虫が知らずか名殘惜氣に立ゐがりてい見廻り〳〵我家をさして歸ける恁て安之助い樣々よ父を介抱し此一伍一什を物語れゞ安太郎い大に驚き彼印籠を手に取りあげ見れゞ思へゞ覺へのある絶て久しき父の品ゆゑ言葉せはしく其名前い如何よと問尋ぬれゞ中山安左衛門と聞より半ば狂氣の如くさてい父上にてお在せしか責てよそあがらゐ無事の樣をも拜せし上言ふべきこと聞べきことをも尽さんものと病苦も忘れ杖にそがり安之助よ介られて二町ゐまり先へ廻り親子とも道の傍に佇立つゝ今か〳〵と待とも知らずして安左衛門い家來召連を來かゝりて端なくも親子顔を視

合せしが互ゐ夫とも名告かぬ只よそおがら對面せし時に安左衛門い言ゐ托して言ひけるやう不所存者の悴こそ勘當の身おれバ致し方も無おれど最愛くも亦孝心深き孫ゐい素より罪咎おけれバ早く柴田へ連來れよ行々い立派の武士よ仕立て親の汚名を雪かせんと獨り喞つゝ行過る影見ゆるまで安之助い伏拜をつゝ暫らくい立もえ去らで居たりしが軈て家よ歸り兎も角も柴田に至り安之助の行末を頼さんものと思へども旅費の用意に當惑せし折柄偶然と心付き彼印籠の二重薹を取外見れバ思ひきや中より十五兩の金子出しに夢かとばかり打欣こび是も親の御情と起つ居つして喜ぶ樣を此五仙宿ゐ名ゐる惡漢にて村雲喜介と呼るゝ者が何の間にか垣の隙より窺ひ見て彼金子を奪ゑんと其夜深更に及び裏口より忍び入り安太郎の寐息を窺ひ只一刀に砍殺し首尾よく金子を盗課せ跡白浪と遁行折しも子供おがら安之助い此形況に痛く激り親の敵逃さじと父の脇差抜より早く跡追ッ駈て喜介が肩先より乳下まで切下る小腕おからゐ天然と備はる無双の勇士の刄先ゐ苦とも言はず倒れたり此物音よ近隣合壁何事おらんと立出で見れバかゝる不時の騒動ゆゑ打驚きつゝ早速所の役所へ訴へ驗使も濟で冷吟味の上安之助い立地ゐ親の仇を撃し事孝行奇特の段ゐ褒美大方おらず白銀夥多其賞として下されけるさて父安太郎の亡骸い懇意の人々懇ろよ世話ーて形の如く野邊の送りも濟ましし七七日の追薦も等閑おらず營みゝるうち送る月日よ關守無く經といおしに四十九日も疾過ぎて限りおれバ今日脱ぎ捨つ藤衣早暮かえりにもゐりけれバ安之助もさらバとて住馴し古郷を跡よ知己人々へ別れを告げ越後柴田の祖父安左衛門方へと趣きける此少年ころ後に堀部安兵衛武常と名告り孰れ劣らぬ義士の中にも武勇絶倫義心鐵石の如き天晴天下の英雄とはなるるおり

○堀部安兵衛高田の馬場仇討の事

恁て安之助い柴田よ至り祖父の方よ身を依て父の横死を物語り只管よたつきおき身を頼みけれバさなれだよ待懇れし安左衛門い且欣び且嘆き心からとは言へ些少の事より一生理木とおり果し悴の死をいと痛ゑ爰ゐても跡懇ろよ吊ひけるさて安之助へは師を撰んで學問い中島孫九郎を先生とし劔術い叔父おりける菅野六郎左衛門を師とし學せけるよ素より天禀の英雄殊に好める道おれバ暑さも寒ゑも饑も眠も厭はゝこそ晝と無く夜とおく一心凝しく學ぶ程に僅にして衆人に抽で今い家中ゐ屈指の壯者といおりぬ此折元服して安兵衛武常と改名せり時ゐ年十五才天晴無双の勇士とこそい人々賞贊したりける是より一年を經て祖父安左衛門い八十五歳の高齢を保ちて病死せり跡ゐて安兵衛が叔父六郎右衛門方へ同居し猶も劔術修業の他餘念おく歳月を送りけるが爰よ不思義の災難出來て藏者の爲に叔父菅野を始め忠義の武士二十八人柴田より暇出で各々涙人とおりける中ゐ菅野い安兵衛諸共江戸表へ立出で八町堀邊に劔術の道場を開き多くの門弟を教へけるが其名四方ゐ響き遂ゐ松平左京太夫どのゐ召抱られ劔術ゐ師範役といおりぬ安兵衛い跡ゐ殘りて此道場を預り又幾春秋をか送りけるうち或時菅野六郎右衛門い同家中の村上庄左衛門と言ふ者と口論し互ひに言ひ募り遂ゐ打果すべきとの事にて場所い高田の馬場と定先たり村上に弟の庄助と竹原一角と其他劔術の心得ゐる若黨中間十一人を召連れ至る六郎右衛門い若黨の佐助中間の段助と主從僅かゐ三人おり恁て六郎右衛門い一封の書狀を認め安兵衛方へ遣はし跡を頼むとの事にて其身い直ちゐ高田の馬場へ至り見れバ先達ッて庄左衛門い大勢引連れ今や遲しと待懸けたり浩る處へ菅野來り暫らく休息し去來や勝負すべしと双方立向ひゝる庄左衛門の方い十一人六郎右衛門い三人なれど更に怯む氣しき無く入乱れ斬違ひ嘆き叫び火花を散して戰ふ有樣目ざましかりける次第おりされども寡い衆より以て衆に敵すべからず多勢ゐ無勢殆ど危ふく見えけるが劔術無双の六郎右衛門い猶も怯

む色おく思ひ砍て打込む太刀の狙ひハ違とず庄助の眉間を充分よ劈裂けをバ苦とばかりお倒るゝを見向も遣らず返す刀よ若黨の肩先より胸先まで破落離寸度砍下たり庄左衛門ハ之を見るより弟の鑢通さじと獅子奮迅の獣を顯はしたゝみかけて六郎右衛門の肩先笹深に砍付る菅野ハ此時已お七八ヶ所の深疵ゑ負し上るれバ心ばかりハ焦噪れども耐りかねて勢と倒るゝ處を得たりと庄左衛門乘懸り首を搔んとする折ーも佐助段助ハ他の敵と渡り合ひ死力を盡して戰ひけるが此有様を見ると齊しく主人の大事と飛來り惣身ハ朱に染み流るゝ朱しゐハ滝の如き其身の痛手も顧みゑ血刀振ッて涙々さながら砍ッて懸る其危ふきこと見るに忍ひず時よ中山安兵衛武常ハ叔父が贈せし一封を見ると齊しく打驚き筆を採て様子を粗々壁お認め殘し置き其身ハ一散よ宙を飛で高田の馬場に駈來り遥かお見やれバ見物の人立ち雲霞の如く群集せり偖ハと驚死數万の人と押分け〳〵漸々馬場の中央へ躍り出で見るに

無惨や叔父の六郎右衛門ハ早討果さゑて血に染み倒れけれバ安兵衛血眼よ成ッて遲かりし遺憾おりさらバ讎を討取るべしと韋駄天の如く走り懸る此時廿七歳軀幹丈く五尺八寸白地の手巾にて鉢巻なし引緒を取ッて襷とせしお如何にかしけん中程より拂つり切れしよ心焦噪ら傍に打捨ありし繩を拾ッて襷とおさんとする折柄見物の内より娘を連し老母慌たゝしく聲かけて立合の場よ繩襷ハ不吉あり是貸參らせんと投與へーハ彼娘の帶留とか言ふものにて然も目お立つ緋鹿子の丈よおまるお情とおし戴き安兵衛聽て十文字にあやどつて眞驀に躍り出で大音あげて我まろハ菅野六郎右衛門の甥に中山安兵衛へ言ふ者あるが今日の果し合を豫てしも知る事あらバ爭で暗々叔父を討せん去來是よりハ汝等皆相敵あり尋常よ勝負せよと言ふより早く三尺壹寸の大刀を引抜き打ふり〳〵眞先お進み來る若堂中間の嫌ひ無く只一拂ひに薙立て切立て弓手馬手へ切倒し猶も進んで戰ふ太刀先最と烈しく砂煙を蹴

立て矢聲を懸け鏖殺にせんものと踏込みふみこみ切まくるこの勢ひよ佐助段助力を得て安兵衛が左右に引添ひ働きけれバ村上方にハ已に七人までも切伏られ少しく色めき立たるを安兵衛見るより勇氣倍々加ゑり憤激突戰叔父の敵おもひ知れと眞甲梨割拜撃ちおたるをさいハひさりまくれバさしもの庄左衛門心慌し遁んとするを安兵衛逃さずをとり懸ッて右の小鬢より胸板まで斜に切裂き浪々く所を首打落しける竹原一角今ハ是までおりと名乘ッて懸るを丁と請留め返ゑ刀に轢車水もたまらず切放ちたり殘る者ども是勢ひに辟易し四度路お分つて遁行くと何國までもと追詰め〳〵苦もおく四人ゑ砍伏せたり安兵衛壹人の働きお見て難無く九人を切殺し汗おし拭ひ一ト息吻き聽て六郎右衛門の側に至り耳に口よせ聲立て如何よや心地悪しく在するか安兵衛お見てハ是ぞ讎庄左衛門并びお一角其外とも某し悉皆く砍伏せたり見受るところ伯父上の手疵急所を外れたれバ何卒療養して本復爲給へ是は

安兵衛高田の馬場よて伯父の讎を討

かりの疵に斯く弱り給ふこと日頃雄々しき伯父君の心にも似ず是喃伯父君安兵衛にてゐぞと聲を限りゐ呼活くれゞ消なんとせし玉の緒も血筋の糸よとり留られいと苦氣よ秋の野末の虫よりも幽けき聲立て斯の如くの手疵あれゞ所詮本復い思ひも因ず但し庄左衛門等をば身の手にて討取くれー事今生の望み足末來の恨を忽地晴たり只願くい跡々の事よろしく頼み入ると言ひ終て果敢なく息い絶にけり安兵衛い力あく〳〵さらゞ是非もあし引取るべしとて六郎右衛門の亡骸を取片付け引とりける又佐助段助い輕者に似合ず斯まで主人へ忠を尽たる其心ざし感ずるよあまり有とて厚く褒美したりしとぞ恁て此仇討の評判世上に隠れ無く言ひ傳へ語り繼ぎて大方ならず噂しけるを淺野家の藩中堀部彌兵衛早くも聞出し我一子を失ひ養子と懇望をり折あれゞ何卒して安兵衛を申受んと種々に便手を求めける开も此彌兵衛我愛子を失ひし元因を尋るに彌兵衛が妻の縁者に三宅何某しと言ふ者ゐり浪人して懸り居たる時に彌兵衛が一子い彌一兵衛と名のり當年十五才になり至ッての美男あり三宅い彌一兵衛ゐ人知れず心を脳し種々にのき口説けれども彌一兵衛いさる惰弱なる性質あらねゞ更に從ふ氣色あく却ッて異見しけるにぞ三宅恥入る事度々あり或時彌兵衛いば殿に宿直し母い娘をつれて他行の留主よき折ありとて又々申出しけるにぞ此度も彌一兵衛信と異見しなれゞ三宅い殊の外痛み入しが兎角思ひ絶がさく威して見んと二尺五寸の刀を抜き欲ッて捨んと言ひけれども彌一兵衛幼年と之言へ武士の子なれゞ少しも恐れず二尺二寸ばかりの刀を抜合せく勝負しけるに三宅が初太刀を請損じ眉間を深く切付られ此手疵に弱りて倒るゝ處を三宅難あく切殺し其儘勝手口より立退きける下人驚き此趣きを早速彌兵衛よ告るや否や心得たりとて浄殿より走り歸り鎗追取つて跡追馳け裏門の際ゐて三宅に渡り合ひ暫時く戦ひけるが難あく突伏せ即時よ首を刎落して彌一兵衛に手向ける元來彌兵衛い男兒一人の事あるゞゝ殊の外嘆きけるが今い是非無く思ひ断て其姉に何卒良智とつて家を譲らんと願し折柄先達ッて妻と娘が佛參の節高田の馬場にて果し合ひの侍ひへ襷の換りよ帶留を貸せしが結ばる縁のはし彌兵衛い頻りよ中山安兵衛の武術を慕ひ種々にして乞ひ求めけるに幸ひ能き手懸りゐりて早速よ申入し處安兵衛得心して首尾よく婚禮相整ひ彌兵衛方へ引越しけるが素より義氣鐵石の如き丈夫あれゞ萬事に小しも怠慢あく君へい忠父母へい孝と其身を厭はず事々るされゞ彌兵衛が家内の欣び假令をとるにものも無く稍々經て身分い勤を引き百石を以て隠居料とし貳百石を安兵衛に譲りけり元彌兵衛いお留主居を勤めしが安兵衛いば馬廻りに召出され忠勤他に抽んで奉公大事と仕へけるい誠よ稀ある勇士ありさて彌兵衛方へ來りしより今年此大變に及びしまで僅かに七年の霜星あれゞ亡君のば恩を受しもいと短かし彼代々高恩を蒙りし大野九郎兵衛を始めとして岡林玉虫伊藤藤井安井抔の者に較ぶる時い其輕重如何ぞや然るも猶心ざしの厚き事言語に陳がたしされゞこそ内助藏江戸表の事い偏ゐ頼み入るとて安兵衛に万事の下知を依托したり譬へ内藏助許したりとも他の人望無き時い江戸表の面々誰か揮指に從ふべき之を見ても其心ざしの比類無況を知るべし殊更十二月十四日夜討の時安兵衛が働き當るに前なく鬼神の如き忠勇節烈い忠臣の中にても誠よ無双の名士とこそい思はれぬ

○鍔屋宗伴の事

爰に江戸池の端に鍔屋宗伴といふ者あり其身有祖のものゐを共去年より隠遁者の如く法躰染衣に姿をかへしが元茶道並に活花にも功者にして而も諸道具の目利に妙を得て最世を易く暮しける一子若年あれゞ女房後見して萬事を計ひけるこの宗伴内匠頭殿の切腹を聞て嘆息し遁世者の如くに成けるい子細ある事あり是い先よ采女正殿の小性上りにて服部宇内といふ者あり當年三十五歳にて十五

年以前に大石内藏助いまだ三十歳頃宇内二十才前後あり
けん内藏助在江戸の時同じく勤番しける然るに此宇内天
然不思儀の道具好にして面も勝れたる目利ありあるとき
無赤銅の雨龍の小拵を求めゝるに慥に祐乗ありと見極め
余程金を出して調ひける常の人見ても目に付す然る處ゐ
宇内ハ其小拵を元にして目貫笄ひ三ッ隠物を仕立て五十
兩に賣出したり此様子を内藏助聞および三十前後の事あ
ゑ共物事慎み深ささがあをバ獨り倩々思ひけるやう凡そ
家老の身として家中の諸士の悪きい異見すべ比筈あり近
習に左様の人有てハ町人心と成て諸士皆道具好とあるべ
し今の内あり迚有時内匠頭殿ゐ他出の主留に内藏助ハ廣
間に出て密ゑ宇内と呼寄せ異見しけるやう此度大ひ成隠
物を拵へて夥しく金儲け致されたる由一段の事貴殿の
堀出し物の悦びに今日一献進ヒヤべし夫に付き慥に聞玉
へ凡そ武士たる者ハ利欲の心有てハ近頃町人に等し武士
ハ主君に仕へて相應の俸祿を玉ハり貴殿にハ二百石の知
行を戴ゝるにあらずやさをバよく義心を守り武藝に達し
主君の役用ゐ立ん事を思ふものあり去に依て工商の上に
立つ然るを貴殿今若輩にて町人の如く商賣に抱ハり利分
を取て之をよしとせらるゝ心底以ての外あり道具の目利
をそる程の智恵を以て兵法武道と學び玉ハゞ出身致さる
ゝ事必然なり斯る事ハ武士の入ざる事あり人として欲あ
き者ハあけれ共欲にハ差別あり金銀に目をくれ利分を心
がけるハ商賣の常あり武士の欲ハ立身し君に忠を盡し名
譽を後代に殘さんと思ふの欲あり夫を出精して目利せら
るゝハ無益あり此以後ハ止め玉へとヤけるにぞ宇内ハ赤
面して此後ハ思ひ止まり四五年も止けるが元好の事あれ
バ目利するに少しもはづれず其上隠物を肝煎して高金を
取りし事度々あり依て武士道立難しとて六年以前ゐ赤穂
を出奔あし江戸へ來りて妻子を持ち富榮へける故に大ひ
に我身を耻て前方大石殿の異見的中し今道具屋と成下り
たりと心にひしと思ひ當り好める道ゆゑに今斯の如くと
て内藏助の異見を後悔し譜代の主君あれバ今度の大變を
聞て悲しを今町人と落されバ是非におよばそとて通世し
けるが又熟〳〵思ひゝるやう今我長袖となれ共心底ハ元
の武士あり身ふ肖にしく自力相叶はず時節到來したり何
樣にも大石殿思ひ立事有べしと思案して先上野介殿方へ
立入る工夫をあーけるに上野介殿ハ茶の湯好にて常々茶
器を求めたるを知けれバ幸ひと宗伴道具屋の事あれバ入
魂ゐあらんと色〳〵の道具を見せて賣代せしゑ何も直段
廉く貸捨ゐーて出入しけをバ大さゐ吉良殿の氣に叶ひ其
上ゐ諸藝ゑ通達あれバ常〳〵伽に出て茶の湯の相手と
成り遂にハ宗伴あくしてハ濟ぬ樣ゑ成々る程ゑ取入けり
堀部安兵衛ハ西瓜賣と成て荷を擔げて毎日〳〵長屋に入
込み或ひハ臺所に來るを見て痛ハしく涙を流して居たれ
共安兵衛ハ曾て之を知らず大高源吾ハ針醫と成り出入し
ける又兩國の小松屋ハ吉田あれバ出合て物語りせんと思
へ共言出す事もならざる故に其義あし只折々出て俳徊な
して出合するゐ小野寺十内ゑ磯と逢ふたり主税同道にて
歸り行く跡より附慕ひて本所砂村の隱れ家迄來りける十
内ゑ對面して涙を流し内藏助が事を尋ねけるに小野寺大
事の義なれバ委敷ハ言ハず宗伴ヤゝるハ疑ひは尤もあ
り去れ共拙者の心底始終知らせヤ可くハ吉良の屋敷へハ
大高源吾等出入そると能知りハあり吉良家へ心ざし有ら
バ某し出入して委敷屋敷の内外共に知りハゐ付き若や復
仇の役心ざしも有らバ手引致すべし某し大石殿の敎訓を
用ひず今斯の姿と成ても心ざしハ鐵石の如く忠を盡すべ
しと他念あく物語りしけれバ十内之を聞て安堵し此度下
向の次第落もあく語りゝれバ宗伴大さゐ勃み悦び主税と
も入魂に成て常〳〵音信しけり扨も上野介殿の屋敷を繪
圖ゐあし長屋〳〵の人別まで委細に書印し十内並ひに内
藏助ゐ通じけるに堀部彌兵衛か書付に少しも違ひあし爰
に於て其誠實あることを知り愈々入魂を結びしかバ吉良
家の案内精密に知らせしのみか討入りの砌り手燭を採ッ

て出迎ひ且其をり速水藤右衛門の娘と母を同道して立退
た後室瑞泉院殿の許さで至りしい習是宗伴が働きありと
ぞ併あがら大石の忠肝義膽凜乎たる節烈を天の助け給ひ
しならんさて却て説く赤穂の城引渡し相濟むや否や諸士
思ひ〳〵に立退しかゞは本家御一類方の使者も漸次〳〵
に立歸りける中に獨り内藏助い伊用の事も是あるよしに
て暫時城下おさし扣へ居たし内屋物出來て甚だ腦みけり
依ッては用大方整ひたれども猶療治して五月の中頃に漸
〳〵暇を請ひ赤穂を立退さける折柄百姓町人よ至るま
で年來内藏助の情を受し事を思ひ出て今更の離れ別を惜
み嘆き悲しむ事宛も赤子の慈母を慕ふが如し内藏助も流
石お名殘の惜まれていと懇ろよ夫々へ別を告げ命あらゞ
又もや來りて面會すべしとて立出々る百姓町人等い種
〳〵の餞當を用意し遙か船場まで送り來りて名殘を惜みし
い誠お例し少なき事どもなり内藏助も亦同じ思ひよ堪ね
名殘を惜めども恁てあるべきあらねゞ種々に諫め様々出
船なし京都をさして急ぎけるが是より先き住居の用意を
小山近藤に依托せしかゞ兩人い據て彼所に至り山科西の
山の里と言ふ所よ田畑を購ひ山林を求め爰を内藏助の住
居と定め小山近藤日々夥多の大工を雇ひて家の建築最も
結搆を盡しけゞゞ土地の者ども之を見て何人の來り住給
ふにやと尋ねる者あるを幸びに特と評判をさせん爲め赤
穂の家老たりし大石内藏助の住給ふよしを語りなるされ
ゞ藏おどの結搆誠に人の目を驚かすばかりあり恁て程お
く内藏助赤穂より到着ありて是より猶々前栽植込み抔の
差圖せしどつき種々の花草樹木等珍らしさを撰み植させ
けりさて内藏助常に土地の者に語りけるい大木いよけれ
ども我一代ばかりに非ず悴主税の世の事を專一とそるゐ
れゞ斯小株の草木を植て漸次に育つを樂むあり抔と逢ふ
人毎お語りけるとかや

明治十五年七月十七日ハ届八月廿七日出板

（定價壹部四錢）
編輯兼出版人　日本橋區品川町五番地　東京府平民　山田伊之助
發賣元　全區室町三丁目九番地　滑稽堂
芝區宮本町一番地　平野傳吉
大賣捌